講演主旨

口腔顔面痛の診断と治療

神奈川歯科大学口腔外科
小林　優

我々がよく知る急性痛(侵害受容性疼痛)は、他の疾患による症状であり、有害な刺激(侵害刺激)から身を守るための防衛反応として、生きる上で欠くことのできない役割を果たしています。一方、痛みが放置され遷延化すると、痛覚処理機構に変調を来し、慢性痛に移行します。慢性痛(痛覚変調性疼痛)は、本来の防衛的意味を失ったそれ自体が疾患であり、それによって生活の質(QOL)は著しく障害されることが知られています。最近の研究(日本)では、成人の 22.5%が何らかの慢性痛に苦しみ、それによる就労不能時間は週平均 4.6 時間、経済的損失は年２兆円に達することが報告されています。また、慢性痛の一種である神経障害性疼痛の QOL に対する悪影響は、寝たきりの末期がん患者のそれに匹敵することも明らかにされています。このような背景から、2022 年、国際疼痛学会(IASP)は、慢性痛を独立疾患として体系化した新たな分類コードを提唱しています。この分類の特徴は、慢性痛を３か月以上持続する疼痛と明確に定義した上で、原因としての基礎疾患や組織障害が不明な一次性と、それらが明確な二次性とに大別し、従来の心因性疼痛という曖昧な分類を排除したことです。このような疾患の中には、歯や歯周組織に原因がないにも関わらず、歯に痛みを感じて歯科を受診する口腔顔面痛(非歯原性疼痛)が数多く含まれています。海外の調査によれば、このような非歯原性疼痛の 7～37%が無意味な歯内療法や抜歯を受け、疼痛の更なる悪化や長期化を招いているとされています。

本講演では、このような悲惨な事態を回避するために、我々が遭遇しやすい代表的な口腔顔面痛について、その発生のメカニズムや診断と治療のエッセンスを最新の科学的知見に基づいて解説したいと思います。